

目白大学図書館蔵・伝周興筆『新古今和歌集』

— 新出伝本の紹介とその考察 —

Shinkokin Wakasuyu by Syuko in the Library of Meijiro University — An Introduction and Analysis —

石澤 一志

Kazushi ISHIZAWA

キーワード：新古今和歌集、周興

Key Words : *Shinkokin wakasuu*, Shūko

一、はじめに

本学・目白大学図書館には、室町時代中期に書写されたと思われる『新古今和歌集』の、一古写本が所蔵されている。この本は、従来学界等に報告されたことのない、未紹介の、いわゆる新出伝本である。よって本論考では、この本についての書誌学的・内容的報告を行うとともに、それに関連する伝称筆者の問題、及び当該本の『新古今和歌集』伝本系統上の位置と、その意義について考察を行いたいと思う。

二、書誌について

まず、当該本の書誌的な報告を行う。目白大学図書館蔵・伝周興筆『新古今和歌集』（以下、目白大学本と略称する）は写本二冊、装訂は列帖装、書写年代は室町中期頃写と思われる。大きさは、縦が二四・四糎、横一六・七糎。表紙は亀甲繫文地に菊唐草繫文様を織りだした、藍地金欄緞子表紙を付す。表紙裏のいわゆる見返しには、水墨山水画に金銀砂子泥雲霞引の、非常に豪華な装飾絵画料紙をあしらう。この絵の筆者は未詳であるが、江戸時代前期狩野派絵師によるものと思われ、二冊の各前後、つまり四面にわたって用いられ

ている。以上の表紙および見返しは、いつの時点に行われたかは明確にし得ないものの、近世になってからの改装後補である。本の内容を示す外題はなく、それを記した題簽が貼られていた痕跡も見られない。但し、上冊目一丁オモテの左肩には題簽の剥がされた後があり、元来、共紙表紙で、これも改装の一つの証しである。本文料紙は斐紙で、室町時代写本によく見られるところの、やや茶色の強い上質の料紙を用いて書写されている。本文は、真名序・仮名序・本文の順に書写し、真名序は、每半葉・一面八行、一行十七字見当で、仮名序は每半葉・一面八行、一行二十一〜二字見当、本文は每半葉・一面十行、和歌は一首一行書き、詞書は歌頭より三字下げでこれを書写する。字高は約二〇・五糎。丁数は上冊が七括り（9紙／17丁（二丁分は表紙内部に貼込み）、10／20、11／22、11／22、9／18、13／26、10／19（二丁分は表紙内部に貼込み）で、総丁数一四四丁、内、遊紙は前一・後二で、本文墨付は全部で一四一丁。下冊は六括り（10紙／19丁、10／20、10／20、10／20、10／20、14／27（二丁分は表紙内部に貼込み）、よって総丁数一二六丁、その内、遊紙は前一・後〇で、墨付は一二五丁ということになる。

この目目大学本には、他に見られない奥書が記されている。以下に翻字してそれを示す。

〔奥書〕（二冊目・一二六丁オモテ）

「永享第三^{（一四三）}之天沽洗仲六之候彼上下以左中将

藤原雅永朝臣秘本令書写校合但魚納之

賤薄鳥跡之凡卑云彼云此敢不可出座外而已

権中納言藤原朝臣^{在判}

彼和哥上下若為當家之遺流及他見者不可為

愚臣之来葉之儀穴賢々々 在判

（読み下し）「永享第三の天、沽洗仲六の候、彼の上下、左中将藤原雅永朝臣の秘本をもつて、書写校合せしむ、但し魚納（網）の賤薄、鳥跡の凡卑、彼と云い、此と云い、敢て座外に出すべからざるのみ、権中納言藤原朝臣^{在判}、彼の和歌の上下は、若し当家の遺流のために、他見に及ばば、愚臣の来葉の儀たるべからず、穴賢々々在判」

この内容の大意を示せば「永享三年、三月十六日の頃、この上下（二冊）は、左中将藤原雅永朝臣の秘本をもつて、書写校合したものである。ただし、紙は粗末であるし、筆跡は平凡なので、かれこれ言って敢えて、座の外に出すべきものではない。権中納言藤原朝臣（花押あり）／この和歌上下（二冊）が、もし当家の遺流の者のために、他人の目に触れるようなことがあれば、私の後世を継ぐ（者の）

業として、ふさわしいものではない。くれぐれも心せよ。(花押あり)」というようになる。この種の奥書として、この本の貴重さを訴え、みだりに他見を許さないように言い置く文言は典型的であるとも言えるが、この奥書に登場するのは、室町時代前期に歌壇を主導した、飛鳥井家の人々で、「左中将雅永朝臣」は飛鳥井(藤原)雅永、生没年未詳で、父は雅縁(法名宋雅)。「権中納言藤原朝臣」は飛鳥井雅世のこと、享徳元年(一四五二)、六三歳で亡くなるが、奥書に見られるところの永享三年(一四三二)当時には、四二歳である。雅永の兄にあたり、文学史および和歌史的には、二十一代集の掉尾を飾ることになる『新続古今和歌集』の撰者として、あまりにも有名な人物である。後半二行の奥書は、前半とは別内容で、誰が記したものか正確には不明という他ないが、「為當家之遺流」という文言からは飛鳥井家に関わる人物である事は確かであり、もし仮に雅世以降の誰かが、後半二行の部分の記主であるならば、自らの父祖にあたる人物に対する、何らかの文言があつて然るべきであるが、それがないことを考えると、これは、飛鳥井雅世が前半部分とは時を隔てた段階で記したものと推定するのが穏当かと思われる。猶、後考を俟つ。

ちなみに飛鳥井家は、鎌倉時代初期、後鳥羽院の側近として活躍し、この『新古今和歌集』の撰者の一人であり、また蹴鞠の名手でもあった、飛鳥井雅経を実質的な始祖とする和歌・蹴鞠の家として、江戸時代、果ては現代にまでその一部を継承する家柄であるが、この奥書の文言を見る限り、この本は、必ずしも飛鳥井家の伝来の秘

本、というような性格のものではないようだ。しかしながら、これまで他に全く知られない奥書であるし、雅世と雅永兄弟の微妙な関係性も伺えて、中世室町時代前期の歌壇史を考える上でも、非常に興味深い。この目白大学本の資料的な意義は、この奥書を有する点に認められよう。また、いわゆる文明新写本の中に、この奥書が見いだされないということは、この本の書写年代がそれを遡る、室町時代中期、それも応仁・文明の乱以前の書写である可能性を示唆しているとも思われる。そう考えるならば、また文明新写本と同じかその後の書写であつたとしても、保存状態に関して言うと、虫損などはほとんど見られず、この種の写本としては、類い希な美麗さを保っている。これもまた、目白大学本の価値——こちらは美術的な面も含めた——であるといえよう。

この本の付属資料としては、本体を保存してきた、桐箱と漆塗の印籠箱がある。印籠箱の蓋表には金泥で「新こきんわか集 法性寺上人周興筆」と記されている。近世江戸時代のある時点での後訛えであるが、非常に立派なもので、大切に伝来されたことがわかる。また、古筆鑑定家による鑑定書である、折紙と極札が附属している。一般に言う所の「折り紙付き」「極め付き」の逸品、というのはこのようなものを指す。ここにも目白大学本の文化史的な面での価値を見いだす事が出来よう。その「折り紙」は、以下のようなもので、本体の大きさは、縦一六・四糎、横四六・五糎、全紙の奉書を横に二つに細長く折った形で、折り目を下にして、文言が記されている。

「新古今和歌集折帙

」(包み紙・表書)

新古今和歌集

全部貳冊

法勝寺周興律師

所筆無疑者也

金子参枚五両

〔七〇六〕
宝永三年

古筆

菊月中旬 了仲(朱印)

」

一方、「極め」の方は、極札きわめふだ(縦一五・三糎、横二・三糎)が附属している。

「新古今和歌集外題

」(包み紙・表書)

「法勝寺周興律師新古今和歌集

(墨印・守村)

」(表のみ・裏なし)

このように、鑑定年代が明確な、折り紙・極札の両方を具備しているというのは、実例として稀少であり、同時にこの本が貴重なものとして扱われてきたことの、履歴書を保有していると言ってもよ

い。

この他、桐箱の底には旧蔵者を示す内容が記され、さらにこの本の伝来を示す書状、また近代になって古書店がこの本について調べ、記したと見られる手紙・書き付けなどが附属しているが、かたがたもって、この本がこれまでこのように美麗な状態を保ってきたことの跡がよく見て取れる。そのような本が、現在本学の所蔵に帰しているということは、奇縁とも言うべき事であり、このような貴重な資料を、今後とも大切に保管・保存し、さらに後代に引き継いで行くことは、現在の我々に与えられた歴史的・文化的な使命である。

以上、目白大学本の書誌的な事項に関する報告を行った。この本が貴重なものであることを強調すべく、やや贅言を弄したが、この他にも、研究上見逃し得ない、興味深い問題を、この本は持っている。それは、筆者として言い伝えられるところの「周興」という人物と、その書写活動に関する事跡である。次に、この問題について考察してみたい。

三、伝称筆者「周興」をめぐって

この目白大学本の筆者として伝称される「周興」という人物については、この本が室町時代中期頃の書写であることを考えると、A彦龍げんりゅうしゅうこう・周興・B 周興律師(伝未詳)の二人の異なった人物を比定する説が併存している。それぞれを検討してみよう。まずAの彦龍周興であるが、この人物は、長祿二年(一四五七)～延徳三年(一

四九一）、三四歳で没している、京都五山、いわゆる禅林の僧侶で、中でも後期五山の代表的な僧の一人、横川景三（永享元年（一四二九）～明応二年（一四九三）、足利義政の側近）の影響を強く受け、五山禅林中、早くより博学・高德を称されたが早逝している。禅僧の世界、漢詩文の世界では学識の高さで高名ではあるが、和歌事跡は知られず、若い時期から身体の強い方ではなかったようで、禅僧の修行および学問に長じていたことから考えても、物理的に和歌作品の書写を行っていた可能性は極めて低いものと考えられる。

一方、Bの周興律師の名は、古筆切および古典籍の伝称筆者としては比較的多く資料が伝存し、その筆跡は目白大学本のそれとも一致する。いくつかを挙げるならば、

① 稲田利徳「道隆寺蔵本『新統古今集』の newly 出資料について」（『文学語学』53）

同寺（香川県多度津町）蔵新統古今集の下帖（室町中期写、堯孝本奥書を有す）

列帖装、一帖。縦二六・一糎、横一九・二糎。料紙、鳥の子。

「此集返納之後以中書之本／最前所令写之也可為規模之／本者歟」（一四四〇）

永享十二年八月廿三日／和歌所老拙権大僧都堯孝」（奥書）

「堯孝門弟周興律師中本一冊」（極札） *筆跡未見

② 昭和五十六年度 東京古典会典籍下見展観大入札会目録、6掲載

の新古今集

（当該目録の解説によれば、永享三年三月飛鳥井雅世の秘本を書写校合した旨の

奥書を有する由の説明文） ↓ 目白大学本 に該当。

③ 吉田幸一蔵〔百人一首古註〕〔長享元年極月十四日〕の書写奥書を有す） *（古典文庫291に影印収載）

列帖装、一帖。縦一〇・一七糎、横八・一糎。料紙、斐楮混漉紙。

「岩鶴丸数奇懇志／異于他間所獻書之／而已」（長享元年極月十四日）（奥書） *除暦十二月の興名

「堯孝門弟周興律師（琴山）」（極札）

などがあり、また、十三代集を含む、古筆切の伝称筆者としても、その名前が見える。^①

また、古筆鑑定家の記した伝記資料である『顕伝明名録』（吞舟軒藤本箕山編）に、「―興 法性寺上人律師堯孝門弟也（連歌師）」（日本古典全集本）のような記載が見られる。目白大本の、折り紙・極札には「法勝寺」とあり、漆塗箱蓋には「法性寺」と記されている。同音であるが故に起こった混乱であろうと思われるが、古筆家の鑑定を見渡すとそれ自体にも揺れが生じており、いずれを是とすべきか、俄に決し難い。しかし共通点として「堯孝門弟」というこ

とは一致を見せている。堯孝（明徳二年（一三九二）～康正元年（一四五五））は、室町時代前期、二条派の領袖で飛鳥井家とならぶ歌壇の重鎮としての地位を占め、『新統古今和歌集』に關しても、和歌所の開闢としてその編纂の中心として関わっている。①として挙げた、稲田利徳の論考により明かにされているが、『新統古今和歌集』を考える上で、重要な伝本の一つ、それは堯孝本の奥書を持っているのだが、それを書写した人物として伝称されていることと、目白大学本の奥書に出てくる飛鳥井雅世が、『新統古今和歌集』の撰者であつてみれば、両者のつながりは見えてくる。つまり、周興は堯孝の門弟であり、その關係をもつて、様々な典籍を書写した人物である、ということが、ほぼ確実に言える。そしてそれがかなりの範囲と量に涉ることから考えると、堯孝の右筆のような存在として仕え、数多くの典籍を書写することを業とする、といった立場の間であつたと推測出来るのではなからうか。今少し、その伝記的な面からの資料的裏付けが必要とはなるが、一応、その人物像と活動範囲を想定しておきたいと思う。

四、もう一つの伝周興筆『新古今和歌集』をめぐる

ここでもう一つ、興味深い現象を紹介したい。それは、前節で考察した、この目白大学本と同じ伝称筆者による、同じ『新古今和歌集』が、もう一本存在する、という事実である。以下、その略書誌を掲げる。

愛知県立大学学術情報センター蔵 伝周興筆『新古今和歌集』写

本、列帖装、二帖

縦二四・二糎、横一七・〇糎、本文每半葉九行、和歌一首一行書。字高約一九・五糎。

本文料紙 斐紙、書写年代は室町中～後期か。

「此集上下両本以二度校合／處猶以非無誤重宗訊所／持本令読合直付了」（上・奥書）

「此集上下以両本二度校合／處猶以非無誤重宗訊／所持本令読合直付了」（下・奥書）

「周興律師（琴山）」「堯孝門弟局興筆（了雪）」（極札・下

冊奥書脇貼付）

「新古今和歌集全部貳冊者／法勝寺周興上人の墨痕且牡／丹花門人宗訊加筆

於卷末共／無狐疑者也予應人之需於是／乎跋／延寶三年

葵賓下旬／
*陰曆五
の興名月

法橋牛庵／随世」（鑑定奥書）

この本の存在は、夙に学会に報告はされたものの、その内容自体はほとんど知られていないと言つてよい。今回、実見調査させ

て頂いたが、結論から言えば、愛知県立大学本は、目白大学本にある、飛鳥井家の奥書を持たないものの、両者はほぼ同一筆跡であり、さらには本文上も漢字・仮名の違いがわずかに見られる程度で、同一筆者によるものと判断してよいものと思われる。同じ作品を同じ人物が二度も写す、ということは、前節で考察したように、堯孝の門弟として、幅広く、右筆的に多くの典籍を書写した、と考えられることの証左の一つであるといえる、興味深い現象であろう。

〔校異〕・国立歴史民俗博物館蔵 伝冷泉為相筆本を基に、

目白大学蔵 伝周興筆本（目）・愛知県立大学蔵 伝周興筆本（愛）・小宮本（小）を対校

○春上

5 詞書 右大臣―右大将（目）右大将（愛）

12 詞書 天曆御時屏風歌―天曆御時御屏風に（目）天曆御時御

屏風（目）（愛）

65 詞書 寛平御時きさいの宮の歌合歌―寛平御時きさいの宮の

歌合に（目）（小）

寛平御時きさいの宮の歌合（目）（愛）

71 作者 崇徳院御歌―崇徳院御製（目）崇徳院御製（目）（愛）

※春下131も同

92 五句 峰の白雪―みねのしら雲（目）

○春下

102 三句 やま桜―やえ桜（目）やえ桜（愛）

113 一句 このほとは―この本は（目）木のもとは（愛）

123 詞書 花歌―春歌（目）春（目）（愛）

161 四句 いまかさくらん―いまやさくらん（目）（小）いま（目）やさ

くらん（愛）

167 詞書 春のくれつかた―春のくれかた（目）春のくれ。かた

（愛）

173 作者 宮内卿―ナシ（目）別筆補入（愛）

さらに、『新古今和歌集』の本文系統を考え合わせてゆくと、これらの本には、もう一つの意義が見出される。『新古今和歌集』の伝本は、後藤重郎により四類に分類されて説明される。その分類基準は、

一、奥書

二、本文（イ）切出歌（ロ）歌の配列・順序（ハ）本文

異同

三、撰者名注記とその有無

四、隠岐删除跡（記号他）

五、作者名注記

などで、それにより、

一類本	元久二年三月二十六日、竟宴本
二類本	： 竟宴以後、家長本成立まで、切継時代の本
三類本	： 建保四年十二月二十六日 源家長 公的最終形態の本
四類本	： 隠岐本（後鳥羽院配流後の、再撰本）

の形で分類、説明されている。『新古今和歌集』の伝本のうち、最も多いのが、二類本で、それがほとんどを占め、そこに四類本（隠岐本）が接触して、実に複雑な様相を示す。

その中で、公的最終形態の本、とされる家長本の考究が、重視されてきた。しかし、これまで、純粹な三類本――すなわち、源家長の奥書を有して、切継過程で切り出された歌を巻末に纏めて有する形態の本は、未だ報告されておらず、今後も出現する可能性は低いように思われる。それに準ずるものとしては、本文中に切出歌を一首も含まない、つまり切継を全て終えた最終的な形態であること、とされてきて、その系統の本文としては、岩波大系本の底本である、小宮本堅次郎氏蔵本が最も有名であるが、その他に、東京大学図書館蔵本・愛知県立大学蔵伝周興筆本（前出）・国文学研究資料館蔵、懷風弄月文庫 92-17、寛永一六年（一六三九）写本・同 92-14、伝飛鳥井雅綱筆本 など、がある。目白大学本は、この三類本に属する新しい伝本であり、さらにこれまで他に知られなかった飛鳥井家に伝わった本を祖本とする、という点でも注目されるものである。

近年、田渕句美子により『新古今和歌集』における家長本の性格を再検討すると、三類本はそれほど重視すべきものとはいえず、

むしろ国立歴史民俗博物館蔵の伝為相筆本（岩波新大系底本）などに代表される、定家の承元三年の奥書を持つ本文とその系統が、『新古今和歌集』に於ける最終的な本文であり、多方面に影響を与えたものとして、優先して考えるべきである、という見解が出された。^②

その主張には説得力があり、今後、『新古今和歌集』を考えて行く上で、基本的にはその主張に従うべきであると思われるが、先に挙げたごとき伝本群が存在することもまた一つの事実として捉えておく必要がある、それがたとえ『新古今和歌集』本文の性質や影響度・流布度という観点からは、決して重視され得ないものであったとしても、我々の先人が、それらを「秘本」として大切に伝えてきた営為を軽んずるべきではなく、それはそれとして、その性質や性格、およびその生成や伝来の過程などを、追求していく必要がある。^③それは単に『新古今和歌集』の流伝のみの問題に関わらず、広く古典籍を書写・伝来していく動き・過程といったものの解明に関わってくるものであり、そのような観点からすると、目白大学本『新古今和歌集』は、看過しがたい問題を多数包含した存在として、伝本上の位置とその価値を主張することになると思われる。

五、おわりに

目白大学図書館蔵・伝周興筆『新古今和歌集』の紹介を中心に、伝称筆者「周興」とその書写活動の問題、および目白大学本の、『新古今和歌集』伝本上の位置とそれがもつ意義について考察を加えてきた。「周興」の素性およびその活動の詳細については、当初の予想

をはるかに超える量が見出された為、別稿を以てそれを明らかにすることにしたい。また三類本に属する系統の本文の総合的な検討も必要であるが、本稿に於いては問題の拡散を恐れ、そこまで及ばなかった。今後の課題とするともに、さらなる伝本の発掘・考究に努めたい。

【注】

- (1) 『古筆鑑定必携』（淡交社、二〇〇四）「35 伝周興筆 四半切」新後拾遺集」藤井常智極」*小林強の解題による
- (2) 『新古今和歌集』の成立―家長本再考』『文学』八一、二〇〇七・一
- (3) 後鳥羽院が最後に所持していた本文が、果たしてどのようなものであったのか、隠岐本の本文の性格などを考える上でも、重要な視点を提示する可能性がある。

Abstract

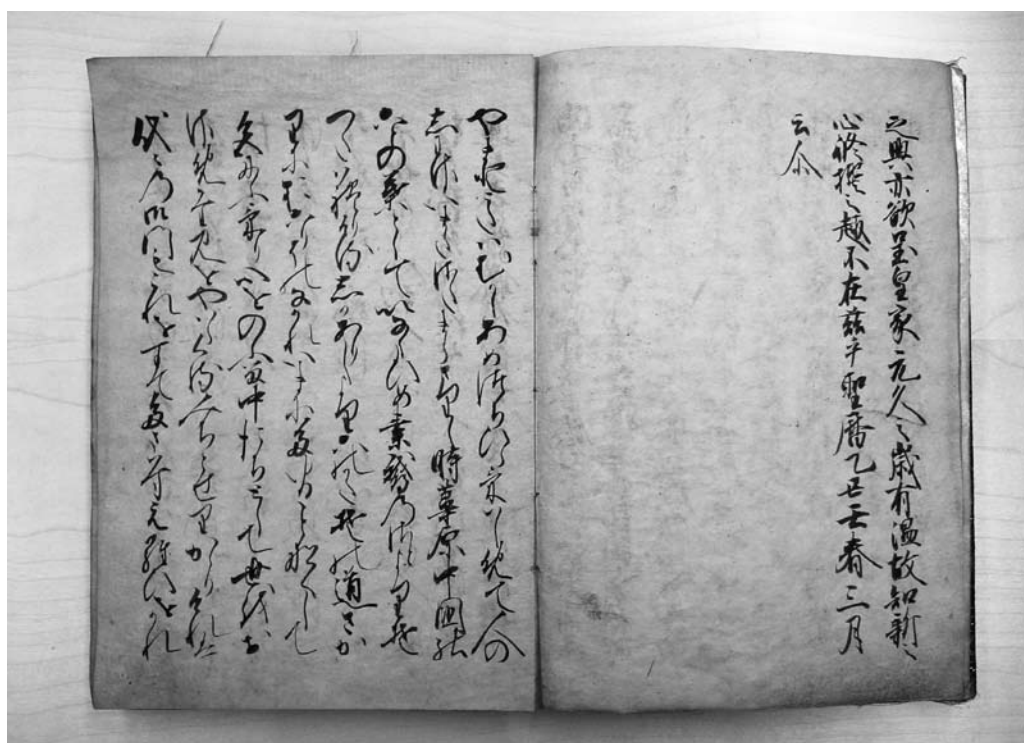
In this study I address a previously unstudied manuscript copy of the *Shinkokin wakasyū*, held by the library of Mejiro University. I consider issues related to the identification of the manuscript's copyist, and address the question both of its place within the known textual lineage of the *Shinkokinshū* and its importance within that lineage. A bibliographic analysis suggests that this copy was made in the middle of the Muromachi Period. Special attention is given to the manuscript's colophon, which does not appear in any other extant copy. After describing its content, I discuss the possible significance of this colophon. I next consider issues related to the attribution of this copy to a certain "Shūkō," comparing the manuscript with other texts and textual fragments similarly attributed, and clarifying this person's history and activity as a copyist. I follow this with a comparison of the Mejiro University manuscript with one held in the library of the Aichi Prefectural University that is also attributed to Shūkō, and discuss possible connections between the two texts. The study concludes with an analysis of the Mejiro University manuscript's relationship to other extant variants of the *Shinkokinshū*, and its overall significance when viewed alongside them.

目白大本
表紙



見返し(上冊)







外箱(桐)



内箱(塗)



愛知県立大学 伝周興筆
新古今集

新古今和歌集序

夫和歌者群德之祖古稱宗言家夫成
 際心情義著素驚此靜一字歌
 由典公泉源流定終長短雖異或擇下
 情而達或宣上德而致化或屬遊宴而書
 懷或採數色而寄言誠在理世於心之潛
 微實公舉事之忠鑑者之也

聖代明時集而飲之各窮精微何一漏脫
 崑嶺玉振之餘鄧牧校修又盡物既
 知此歌亦宜花仍諸春議有街則替源胡上通
 具大哉柳條忽胡上有家近街權中將藤
 原胡正之家示上鑑介藤原公能公能公能
 街權少將藤原胡正惟深業不擇貴賤高下
 今擬辭白玉章神明詞佛隨之作表希

真名序

愛知県立大学学術情報センター蔵本 真名序

新古今和歌集卷第一

春上

九十八首

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

春の上りてふれはるる
 新古今和歌集

同上 春上巻頭